

第七十一回

〇先生賞候補作品

本年度の〇先生賞選考では、受賞作品のほか候補作品二十一篇が決まった。このうち優秀作品四篇、佳作として八篇をそれぞれ抄出し掲載する。

優秀作品 私のひとくちはでかい 清 水 美 里*

精神科待合室で（中木とは）検索しおり付き添いの夫
（第五条 傷病による欠勤は一年半後退職とする。）

あと何度あと何人につくだらうすつかり元気ですという嘘
四ツ谷まで来たのに。たのに。駄目だった。三日坊主にさえなれないか
連日となり申し訳ありません。今日もお休みさせていただきます。

遠まわりして帰りたいけれどもう近道ばかりやたら詳しい
オロナミンC五本買うおじさんの元氣ハツラツ願うコンビニ
もうすでに靴擦れしてる左側かつかつかつ平気かつかつ

音たててぶいっとされて仕方なく会釈だけする女子トイレ前
通勤に慣れ勤務にも慣れサボることも慣れて噛んだ舌痛い
大きじと小さじがぶつかり合つて出す高いミ かわいそうと言つてよ

ちゃんとするちゃんとするっていう呪文唱えるあーもブラジャーきつい
血だ ちがう 赤信号に照らされた水たまりだな ああ怖かった
れるれると焦燥感に揺れているいつも（たたかうへにげる）の二択

念のため録音ボタン押す（なぜかこつちが悪いような気がする）
精神が悲鳴をあげられぬときは体があげるグルか貴様ら

なんだってこんな感じだ点滴の名前を知らぬ部位を見ている
鼻つまみ確かに肺が鳴っている音だということを確認す

さあしろくしろくならうか「らしらしら」左の肺のいただきは雪
江戸弁の祖父の病室瘦せた頬最期のことば「うまいもの食え」
点滴の針を抜かれた左腕また刺さるまで少し泣こうね

ここにはいものがどこかにあるなどとおもえなくて息だけはす
少しずつもつと手を抜く玄関に放置している昨日のマスク
屋上でプラのお椀の三色丼食べる私のひとくちはでかい

優秀作品 のりしろ 川 田 ゆかる*

ていねいに五本の指の靴下を履いてるときの静かな呼吸
ひっかける釘と穴とがはまらずに円盤状の置時計とする

（ジャケットに噛み跡あり）のレコードを入札するか7秒迷う
ひたすらにかけっぱなしの歌のなか「ビバ」つてワードびよこつと飛び出す
ヘアブラシにからんだ髪を取りながら昨日の電話を思い返すよ

つめたくもあたたかくもない彫刻の表面に似た床の感触
だからとつきまとわれると思つてた紐付きイヤフォンが今は恋しい
すくわれない涙は頬に染み込んで保湿の水となつてくれたら

こうやって一日はまた過ぎていき明日の九時には会社に座る

ベランダに干されたタオルははためいて助けを求める でもごめんさい私にはのびしろでなくのりしろがないんだろ うな両腕をさする泣いていたことを体に残しつつ今何時? って優等生かよ

すくっとは起き上がれない腹筋の弱さに我の人生があり

泣いていたことを誰かにばらしたいナルシズムとコンビニに行くコンビニの入店音は無差別でぎゅうぎゅう詰めの数坪の箱常温のボトルの水はわが腕を定位置として無邪気に揺れる

松屋町通りの一方通行の世界はわたしと逆にすすんで

お天気お姉さんのいう「夕方に雨降ります」当たりそうです

てのひらを突き抜けそうな銀の雨、一気に落ちて鴉も消えた

(映画なら濡れたまんまで歩くだろう)おととととと急いで帰るベランダのこつち側には雨は来ず私はいつもこつち側だから床上に置かれたままの掛時計しんどい角度で踏ん張っている

長針は何周したとかスルーして猫のあくびの写真だけ撮る
パスワードの全てを換える絶好の日和に猫が膝にはりつく

優秀作品 なりそこね

中村

恵*

藍の葉を砕いて揉んで汗かいてからだじゅうから生葉なまはのにおい染液に浸けながら聞くこのお盆実家で流しそうめんしたと

いまは失き白き薔薇の木ちちははともうとの住む速き家の庭山鳩の低く鳴く声いつからかもうとの泣くこえでこえる

丸三つ下のいもうとゼミ室でながあつたか言わず二十年

ひとつ家に病むひとつふたりみたりいてひとり泣けば家族あやうい

ふる梅の夏の繁りの翳のおく足なげだしてやすむ白猫

「う」の口でうなずくわれら堀川をめぐる舟にて川鶴と聞けば「ちょっと貸して」「いいよ」それから消しゴムの角使われてけんかしたけつぎつぎにいもうとからのLINEあり母が不機嫌、母が虐める

あたたかい声をととのう あの子にはぬるい麦茶に感じられてもふるさとのいばらきはるかいもうとをぼつりぼつり受けとめてゆく降っていた雨がががってすきとおる遠浅のいろ染めたブラウス水張田朝たのひかりふくらみて飲みこまれにしらさぎとわれ

わたくしはナイチンゲールのなりそこね耳傾けるくすり飲みつつ紙製のストロー好きになれなくてそんな部分を隠してすすぐ

会社では部長ですって顔をしてじつはだれより気にしないな母

できるなら優しくしたいできるならやめて逃げたいお姉ちゃん役おとなたちビールを飲んでこどもたち花火する夏ほんとはあるか痛くってロキソニン飲むロキソニン飲んだら速く走れる気がして

玄関の硝子戸の外まつしろい猫がわたしを母を見張りぬ
父だけがいつもしずかだむかしから蜻蛉のように淡々として

右がわの背中がいたむその場所にだいいじなものはないと聞いても
染液はみどりに濁り風とおる日陰に干して秋はすぐそこ

優秀作品 ゆふだちの後の雲

三沢 左右

明けなづむ梅雨の七月たくさんの虫、虫、虫が窓にあつまる
しづしづ三十八度七分と体熱あがりつつあるをちひさき窓のちひさき夜空

父親の誕生日けふ発熱のことは書かずにLINEを送る

熱、やはりコロナなりけり職場には欠勤と引継の電話せり

妻と別室、エアコンはなし リビングの涼気を扇風機で送り込む
父も熱出^{父は熱帯症かなんか出して}してゐるらしい誕生日祝ひのLINEに返事短し
うたたねと読書にをはる一日は口縛られたゴミ袋のやう

「プレゼント買ひに行くのはいつにする？ などと妻とは相談してた
「父が入院^{父はコロナにながった}長引くかも」と母のLINE、数時間後に「危篤」のLINE

もう父は死ぬらしいもう会ふことはできないのだなあとしづかに思ふ
ふつかかんの昏睡^{ねむり}のあひだ誰の夢を、母さんの夢を、見てゐたらうか
のどがかわいてゐるだらう大き蛾は一夜引き戸にしがみつゐる

父さんの死を言ふ母の声がする 電話に出れば電話口から
まだ声はとどくだらうか母は亡き父の耳にスマホ当てたり

ひとことをひとつのことを言ひをへて通話終了アイコンじんと押す
指定ゴミ袋にマスク放り込み口を縛りつかたたくかたく

ゴミ捨てのついでに渡る歩道橋ゆふだちの後の雲にちかづく
ボウリングせがんで父に連れてつてもらふ日曜日が好きだった

久世橋をわたり吉祥院ボウルへ父の車は朝を走りき
うつらうつら本読みをればはつきりと父の声せり「行こか」とぞ

「父が亡くなりまして」つていふたびにすこしづつなくなつてゆく父
通夜の日の早朝妻と駅に着き間に合つたねとささやき合へり

錠剤を飲み忘れたり平熱に戻れば熱のことは忘れる
清酒(酔鯨)ずいと嚙りぬ かつて水を砂場に撒きて吸はせし日あり

佳作 ひびくひんげ

白川ユウコ*

柀^ひをひとつ拾い見上げるおおぞらの幅をまだまだはかりかねては
遠州の風はざんざん松の木を颯々^{ささや}と吹く風のざんざん

子は産まず祭に出ぬも浜松のおみなであれば法被の受注
無職いる？地下アイドルの問いかけに今年きくりとしなくともよい

《袴田さん再審》のビラ受け取つておく先週ももらつたけれど
ジルバツかぶつたひとと着物きたわれと目の合う春のそよかせ
こうえんで バーベキューは やらないで 白い看板 (やさしい日本語)

松潤がどれほどずばらしいのかを叫ぶ女性が駅前に居る
地下道のかたち地下の風が吹く毛布と人が隅っこに寄る

ひさかたの天竜川の河原にてミルクレープの石をみつけた
あおあおと遠州灘のみんなの太平洋へ河口はひらく

《小豆餅》餅屋の婆の執念がバス停の名に遺る(銭取)
布橋の雪を踏みたるもののは吸われてゆけり谷の底へ^{そこへ}

遠州は綿織物のよいところ布一反を風にさらしぬ
アオイ科のワタの実の綿ふかふかと水の旅する種の乗り物

織物をガチャツと織れば万単位お金を生んだガチャマン景気
素裕に着たる遠州綿細きわまるおもい今とくになし

ペランダの風のぬくみを肌で見る夕暮れまでは上着は要らぬ
むこうから粋な浴衣のひとつと来ればうしろ手にしておはしりを引く

繻帯の会社^{会社}のビルとあおぞらの飛行機雲がななめに交る
コール工場計画倒産し社長夫妻の住むオアフ島

どこにでも住める気がする戦争がなくて履物一足あらば

佳作 一九六八年前後

藤田 邦彦*

日共も反日共もわからぬに桜の下でオルグされたり
田舎では聞いたことなき単語群「反帝・反スタ・造反有理」

「言語にとつて美とはなにか」だの「共同幻想論」だのと言ひ募る居酒屋コンパはでかい声勝ち
左翼的気分横溢大学の過半はストで占拠中なり

世界中に学生反乱拡がりて長髪、ヘルメット、ファッションとなる
びつしりと文字で埋まつたタテカンを読了までが一仕事なり

「自己否定」なる語大いに流行りしがそもそもオレに自己があつたか
旗竿と盾当たる音こだまして空曇るほど投石が飛ぶ

諸セクトの機関紙アジる「革命は目前にある命捨てる」と
デモに行く友いつになく握手してアパートの階段下りていきたり

剣道をやめてセクトに入りたる友は羽田で逮捕されたり
デモのなかジュラルミンの盾落されて足潰された男を担ぐ

ガス弾にたたくなくまる傍らを機動隊走る靴音立てて
もしや子がおりはせぬかと国中の父母見入るテレビニュースを

帰省して働く友をたずねれば「お前もアカか」と軽く聞かれる
お互いが距離を測りて口数も少なくなりぬ「正常化」後は

ゼミ再開姿を見せぬ男ありて確かな消息知る者がなし
卒業証送られてきてまず嬉しビールをつけてかつ井を食う

古文書の一つも読めず卒業す 文学部史学科日本史専攻
カラオケで「いちご白書」を歌うやつ軽蔑しきれず苦い酒飲む

焼鯖の骨せせるとき遙かなり学食そして学生反乱
天袋の奥に忘れたヘルメットわが住む町では可燃ごみなり

佳作 引越し前夜

大池 アザミ*

もう一度育つた町で暮らしたい鮭が戻つて朽ちてゆくごと
この家に幼い子どもいたのだとポケモンシール貼られた柱

友人も家族もいないふるさとのリニユーアルした駅のうどん屋
引越しの先に必須の条件は図書館、イオン、安いプールも

家具道具ひとつひとつを手にとつてこれからの日々何が要るのか
内見で夢想している自転車でここから図書館通う自分を

子ども部屋もう不要だがさりながら子どものための部屋が必要
屋根裏に積んでいた箱検分し歴史の一部これも処分か

紙袋ずいぶん増えて驚くが経緯があつてこの家にある
裏庭で自生しているオジギソウ君も引越しするか 葉に触れ

この春も花を咲かせたコデマリをあきらめるのに時間がかかる
引越しをするよ 小さく声かけるピアノの上の犬の骨壺

子どもたち住んだ経験ない家を実家と呼はせる後ろめたさよ
アルバムがずつしり重い新しい生活に向け引きずつてゆく

手を洗うどこへ行つてもその場所で継続される所作のひとつに
毎日のように通つたスーパームも縁が切れる日近づいている

階段の隅や柱の根つことかここで暮らした痕跡消えぬ
念入りに掃除機かける花嫁に化粧ほどこすような心地で

弁当を買ひに出た夫待ちながら茶碗をくるむ引越し前夜
佳作 歳月 田口黎子

数人の学生道に輪をなしてでかんしよ節踊る征く日近きか
すれ違ふ陸軍さんの軍服のカーキ色嫌ひ 戦争の色

後継ぎの兄の戦死も空襲に家焼かれしも泣かざりし父母
十二にて叩き込まれし「君に忠」北朝鮮に育つ子思ふ

将官の戦死を讃へ使はれし「従容」の二字心に残る

月光を頼りとしたり灯火管制厳しき夜々の疎開地の湯浴み空を焦がす火の色見つむ上級生動員されし工場ならんか表情の常に変らぬ教頭の涙こぼしぬ玉音放送

何よりも空襲の無きが嬉しくて空を見上げし八月十五日時永くしまひ置かれし琴爪をはめれば耳に六段の曲

子のむかし幾たびか悩む譜面では教へぬ琴の「間」の難しき指先の激しき動きに盛り上がる曲は華やか弾くに易しく疎開地に行くわれ駅まで送られし琴の師匠の安否を知らず

思はざる歳月を生き九十三戦死の兄の遺骨戻らず高齢者見る目の偏見八割の医者感嘆す「頭が確か」と地味過ぎて華やか過ぎて年が出る九十三のお洒落は難し

いつまでも共に居られる気で居たり聞くべき事を聞かず終る年老いて口数少なくなりし夫「熱病だつた」と恋の日を言ふ死は無ならんあの世で逢へると思はねど夫の後生を祈る切なさ

佳作 妻の声

下城 公秀

バスケット選手の妻を冒せしはリウマチ 原因不明のやまひ通院が子らのドライブ週末はおにぎり車中でほほばりながら指関節すべて変形せし妻の絞る布巾は水もてやはし

入院の妻を祈るとゆく神社あかとき闇にほふどくだみ入院の母を恋ほしみ泣く吾娘を抱つこして見るベガ、アルタイル休職の途中退職リウマチに抗ひ得ざりし妻三十七

リビングの妻のベッドにおのづから子らは寄り来て声ははづみぬ来たるべき長期入院妻の声子らに聞かせるすべ模索しき

梅雨けむるあかとき闇に浮かび来しアイデアアマチュア無線交信下の子が九歳になり決めたりき四アマ無線国試の受験

小三の娘の理解に無理はあり無線工学法規の漢字無線法規の意味も分からず叱られし「うなみこゆるせ汝がためならむ」

家族での無線の勉強会終へし夜眼にかがよふメマツヨイグサ受験する朝家を出る午前四時義母がもて来したご飯おにぎり試験場ランド隅で下の子とさらひき六百問の四択

無線局開局翌年入院す妻はハンディ無線機もちてリビングに無線で届く妻の声コールサインで子ら応答す受験より三十三年ランドは商業施設となりてにぎはふ

佳作 鬼胡桃の木

谷 真樹*

開伽水を蓮の葉っぱでとりましようわたしのふこうは母のしあわせ春がすみの空はわたしのせいじゃない自分で勝手にちやもやしときな谷川に実をつきはなす鬼胡桃 子を愛さない母親はいる

夕焼けは顔を叩かない 父親の気持ちをつたかめようもないがものさしは素手よりランクが上と云い水あげの悪いグリアが枯れるしあわせも自作自演で憎しみにかさ増してゆく多摩川を見ゆ凍てついた橋の真中でちどもる月を一瞥し月も一瞥す

百合よ百合わたしの余談を聴いてほしいあわせてゆれるふりてよいから花首ごと剪定鋏で切り落とすうなずくだけで聴いてないよね今はもう静かになったと云うけれど母の脳を黄花が埋める

のみこむしかなかつた怒りを吐くために喉のおくへと怒りさしこむしまわれたもの手ばなして雪原で旗をふるうよ真白な旗を

感情にミュートをかけて生き延びた川面はやがてひかりをかえす
そのままでの存在でよいみつばちもブルーベリーも欠けたあなたも
ひさかたのひかりを摘んでジャムにしよう欠けたわたしで愛されるから
傷つきのぶんだけ愛をうけとれず肩ごしにみた真冬の星座
べつにもう追熟をする必要ない月をみている夜のしずけさ
愛されはしないとさとりし水源でわたしのことはうたへとかわる
谷川にすずなりの碧のたましいをただほうりこむ鬼胡桃の木

佳作 まだまだ歩く 藤井徳子

頑丈な杖はあらねどこの太き足に一步を今日も踏み出す
独り法師は時の分限者バスに乗り乗り継ぎて行く深大寺まで
肺がんの術後に登る坂道があるける歩ける小さなよろこび
ゆるやかな坂をのぼれば深大寺城跡にひとり秋の日の贅
空堀に落葉重なり兵の影はも顕たぬ小春日和に

強風に公孫樹の黄の葉わつと降り心に光り充ちくる瞬時
ふるさとの池に似てゐる姿見の池に來たれりさびしきときは
鬱の文字解体すれば何事もなかつたやうなまつ青の空
点滴を受けてゐる部屋に小一時間人体模型に見られてをりぬ
耳とほくなりて聞かれぬ蟬のこゑ抜け殻ひとつのせる手のひら
青空に「道」と幾度も書いてみる傷なきけふの空を見あげて
たまきはる露のいのちを置く草のあまたの量の露のかがやく

佳作 ぶどう畑の丘の上 三好専平*

妻とわれ仲良く生きて恙なき微笑みかわすデイに行く日も

トゲトゲのサボテンにこんなに白い花が咲くなんて 我也頑張つて生きねばならぬ
杖つきて三足歩行もおぼつかなし 腕を抱えられ送迎バスに乗る
夜の尿瓶使い終わりし手をつかいベッドのシーツ直しておきぬ
マスク付けしやべらぬ人が揃いたるフロアに昼食はこぼれてくる
わたしにもまだまだ夢があるのかなと心ひそかに思う日もある
デイに來るお年寄りのみな無口 ああとらわれし囚徒のごとく
優しさとは胸いっぱいに息を吸うことやでと医者には教えてくれる

寂寞たる老いの日常詠みながら行きつくさきは杖が一本
ぶつつかり、立ち上がり、手を取り合い、一緒に歩くデイの老人
送迎のバスを降りてバイバイし、暑いなあと衣服を捨てる

ドラドラダ、グウグウフニヤフニヤ、トテチテタこれが私の命のリズム
佳作 現在位置 川越 三紀子*

遙かに見し重たき二重のドアを抜け車椅子にて無菌室に入る
第一歩「濡れタオルだめ！」と咎められる無菌室とは如何なるところぞ
心エコーぼこりどたべぼぶ干潟の音 われも海から來たかも知れず
日に六度フルオロメトロン目にポトリ目蕩む微睡むフルオロメトロン
やがてみな去り行くというわが髪の一筋一筋を丹念に洗う
ありんこが現れたならおそらくはやられてしまう今のわたしは
検査後にくしゃみで鼻血とぶかかもです真顔で告げられアハハと笑う
「ただいま」子の声に目覚める夜明け前うすはな色の空は広がる
我が身よりかつて離れし子の細胞還りて再生を助けるという
新しきからだ産み出す苦しみに耐えられるかと覚悟問われたり